

わ

が

街

わ

が

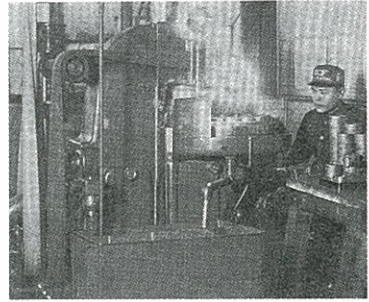
故

郷

光洋精工発祥の地－猪飼野

大正10（1921）年1月、それまでイギリスの
ホフマンやドイツのF&H Sブランドを輸入、
販売していた光洋商会は、社名を光洋精工社に
改め大阪市東成区猪飼野東4丁目（現生野区桃
谷5丁目）に本格的なベアリング専門工場を建
設しました。以来、光洋精工はこの年を創業年
とし80余年の歩みのなか、さまざまな分野でつ
ねに新たな価値を創造し世界各国のお客様に愛
されております。

しました。



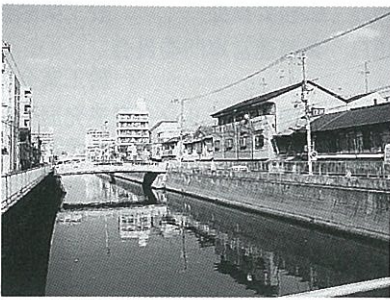
猪飼野工場での研削工程

1. 創業の地「猪飼野」

猪飼野のあたりは大阪市の東南部に位置し南
北に平野川が流れ、生野区民の4人に1人は外
国籍住民という国際色豊かな街である一方、万
葉の時代からの歴史が残され、だんじり・地藏
盆などの伝統行事が大切に残されている人情味
豊かな土地です。近辺には、焼肉の匂い溢れる鶴
橋や昔の面影残る今里があり、勤め帰りのサラ
リーマンで賑わっています。しかし、工場を建設
したころは、小説家城山三郎氏の「1/10000mm
に挑むベアリング 光洋精工」によれば猪飼野
に工場を建てた大正10年当時は、遠く北西の方
角に大阪の灯を望む一面の葦原と水田がつづき、
その中に村落が点在している程度であったよう
です。猪飼野工場はこうした田園風景のなかで、
従業員も約30人という町工場としてスタート

2. 猪飼野の歴史

猪飼野という地名の由来は「日本書記」に記さ
れた「猪甘津（いかいつ）」から来ているといわ
れています。「猪甘」とは猪飼・猪養と同意で、
朝廷に献上する猪を飼育する人（猪飼部）の居住
地であったと考えられています。また、「津」とは
港のことであり、かつての猪飼野は難波の入江
の港町であったことがわかります。その後、猪飼
部は飛鳥時代以降殺生を禁ずる仏教の教えもあっ
て消滅し、猪飼野の地名だけが昭和48（1973）年
の町村改正まで残りましたが、今では「猪飼野
新橋」といった橋名などにその名を留めている
にすぎません。なお、「日本書記」に「猪甘津
に橋なす。即ち其の處を號けて小橋と曰う。」
という記述があり、書物に記述される最古の橋
が猪飼野新橋のルーツといわれています。



平野川猪飼野新橋

この猪飼野付近にある「御幸森天神宮」は今から1600年ほど前、仁徳天皇が我が国に帰化した百済の人々の生活状況を見聞する道すがら、当地の森に休憩された由縁から御幸の森と称するようになり、仁徳天皇崩御の後、この森に社を建立し、天皇の御神霊を奉祀して御幸の宮と称したと伝えられています。平成12年、国の文化財に指定された社殿は長い歴史を包み込むように静かに佇んでいます。



御幸森神社

ほかにも、5世紀前半の中臣氏の祖「大小橋命」の墓といわれ、茶臼山古墳、帝塚山古墳と並んで大阪市内の重要な史跡の一つとなっている「御勝山古墳」(大阪夏の陣で徳川秀忠が戦勝の宴を行ったことから御勝山と言われる)や、スサノウノミコトを祭神とし創祀1600年ごろといわれる生野八坂神社、聖徳太子の時代に建立された黄檗宗舎利尊勝寺(通称：舎利寺)など日本の原点を思わせる史跡が数多く残っています。

余談ながら、松下幸之助が大正6年に大阪電燈を退職し、ソケットの製造を始めたのもこの猪飼野の2畳と4畳半の長屋であり、松下電器の原点もここにあったようです。

3. 現在の姿

現在の猪飼野付近(生野区中川)には、在日韓国人が多く住んでいます。もちろん、かれらは古事記時代の渡来人の子孫ではなく、国際都市大阪に移住しその発展を支えてきた人たちです。今では、通称「コリアタウン(生野商店街)」と呼ばれる商店街に、かれらの日常生活を支えるさまざまなお店が立ち並び、大阪弁と韓国語が盛んにゆきかい、いながらにして異国情緒が味わえる活気溢れる街になっています。



生野商店街

大阪に来られた際には、当地を訪れ喧騒の中に身を置いてみませんか。小さな花びらが寄り集まっている生野区の花「紫陽花」のように心のふれあいと連帯を千数百年の歴史に刻む発祥の地猪飼野から、何かを感じることでしょう。